

「神の介入 ②」

マタイによる福音書 1章 18節～25節

説 教 本庄侑子牧師

私たちの誰もが、一人で向き合う闇を抱えています。誰にも言いたくない過去や家族の歴史を背負っています。しかしそこにこそ恵みを注ぎ、神が共におられる場所に変えてくださった。それがクリスマスの出来事です。

マタイによる福音書の冒頭には長い系図が記されます。この系図なしにクリスマスを語れないからです。これはイエス・キリストの系図です。ユダヤ人たちにとって、私たちの家系から救い主が生まれたんだと誇りたくなる系図のはずです。しかし、名前を読んでいくと、不都合で、恥ずかしい歴史をあえて暴露していることが分かります。

ヨセフは、この家系を背負って生まれました。アブラハムから始まり、ダビデ王を輩出した誇らしい家系に見えました。でも、実際は問題だらけ、破れだらけでした。どこの家もそうでしょう。家族の歴史には、それぞれに独特で複雑な問題があり、その影響が幾代にもわたって残っていくのです。

「ヨセフは正しい人であった」(19節)ヨセフはマリヤとの婚約期間、決意していたかもしれませんが。うちは色々あった。でもそれは自分の代で終わりにしたい。自分こそはいい人間になって、幸せな家庭を築きたい、と。婚約期間こそ正しく生きていたことでしょう。

しかし、そんなヨセフを青天霹靂の出来事が襲ったのです。婚約中のマリヤが妊娠してしまいました。実際は聖霊によって身ごもったのですが、そんなことをマリヤの口から聞かされても、苦し紛れの言い訳としか思えないでしょう。律法の正しさを追求すれば、マリヤは石打ちの刑で殺されてしまいます。

ヨセフは悩んだ末、ある結論を出します。19節「夫ヨセフは正しい人であったので、彼女のことを公けになることを好まず、ひそかに離縁しよう決心した。」このタイミングで婚約を解消したら、結婚前に妊娠させておいて、マリヤを捨てたひどい男と言われかねません。そう言われることを覚悟の上で、そのような結論を出しました。本当ならマリヤが受けるべき非難を、自分が引き受ける。それが、この時のヨセフなりの、マリヤへの精一杯の愛だったのかもしれませんが。律法の正しさを破ってでも、自分が持てる精一杯の正しさを振り絞って、この結論を出したのかもしれませんが。

しかし、ある人は指摘します。ヨセフは恐れていたと(20節)。得体の知れない子どもにマリヤが愛情を注ぐ姿を受け入れることができるだろうか。知らない男の影が現れてくる子どもの成長を喜ぶことができるだろうか。嫉妬、独占欲、怒り、不信感を正しく治めて、夫としてマリヤを愛し、父として子どもを愛する自信がどうしても持てなかった。だったら今、人々の非難を引き受けて、ひどい男として生きていく方がよっぽど楽なのではないか。

想定外の出来事は、私たちの罪を裸にします。正しく生きようと決心した時には気づかなかった罪をはっきりとさせるのです。ヨセフは、マリヤが身に負った出来事を一緒に引き受けることができませんでした。見せかけの自己犠牲を払うことしかできませんでした。この出来事を通して、マリヤを真実に愛することができない自分の罪がはっきりとしました。この時、順調に結婚していたとしても、この罪の問題は遅かれ早かれ、どこかで顔を出していたでしょう。

自分の正しさに下した決心の中で、自分の罪や卑怯さに悩む暗い夜。そんな時です。夢に御使が現れました。御使が告げたのは、その罪からの救い主、主イエスの誕生でした。神である方が人となって、この出来事の中に入ってこられたのです。自分の正しさではどうやっても倒せない罪という壁を向こうから乗り越えるようにして、イエス・キリストが入って来られました。私たちの罪深い歴史の中に、それぞれの人生の中の覆い隠さずにはいられないような所、一人で背負うしかないと思っていた闇の中に入ってきてくださった。私たちの代わりに罪の裁きを引き受け、新しい命に生かすために。

ヨセフは眠りから覚めました。御使が命じた通りにマリヤを妻に迎え、生まれた子にイエスと名付けました。主は救い、という意味の名前でした。イエス・キリストを自分の救い主としてその心に、人生にお迎えしたのです。その心には、これまでのどんな暗闇をも照らす明るい光が差していました。

どんな闇も、眠れないほどに悩み苦しむ暗い夜も、イエス・キリストの光が届かない闇はありません。あなたが背負っている闇の中にも、イエス・キリストは入って来られました。今年もクリスマスが近づいてきました。世界中の人々と共に、この光を仰ぐことができますように。